＄＄＄

国書刊行会　2018年12月　海外文学新刊
（全5枚）

――先生が自分のお金は自分のために働かせなさいって言ったら、おまえは先生に言い返してやるんだ、**コツは他人のお金を自分のために働かせること**だってな、分かるか？

ウィリアム・ギャディス

『*JR*』

木原善彦訳

ISBN：978-4-336-06319-9　A5判上製　940頁　8000円+税　2018年12月20日(木)刊行予定

１９７６年度全米図書賞受賞作

１１歳の小学生が
巨大コングロマリットを立ち上げて
株式市場に大波乱を巻き起こす――！？

世界文学史上の超弩級最高傑作
にして
腹筋崩壊必至の金融ブラックコメディ
ついに邦訳！！！

＄＄＄

$$

●ＪＲについて

本書の訳者である木原善彦氏が、あとがきにこう記している。

> 私たちが本当の意味で革新的な小説に出会うことはめったにない。二十世紀以降で言えば、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』、ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』、ガブリエル・ガルシア=マルケスの『百年の孤独』、W・G・ゼーバルトの『アウステルリッツ』などは間違いなく、そうした意味で傑出した作品だろう。そして今、読者の皆様が手になさっているのもまた、それらに劣らぬ革新的・独創的・画期的作品だと私は信じている。

ギャディスは本国アメリカでは「ジョイスの再来」とも言われている非常に有名な作家で、ポストモダン文学の旗手として、『重力の虹』のトマス・ピンチョンや『アンダーワールド』のドン・デリーロとしばしば並び称される。本作『ＪＲ』をはじめ、現代社会の混沌とした様相を凝縮された文体で捉えたその作品は、各誌紙の選ぶ文学作品のオールタイム・ベスト・リストにしばしば挙げられている。しかし、日本での知名度は他の作家と比べてあまり高くない。何故か。これには単純な理由がある。

> ……これほどの大作家が日本であまり紹介されずにいた大きな理由の一つはおそらく単純である。すなわち、翻訳に手間がかかるということだ。どの作品も大部であるばかりか、文体が非常に特殊で、発話の途中で遮られることも多く、特に日本語のように語順が英語と大きく異なる言語に訳すのは難しい。しかし、それはしょせん技術的な問題であり、大半は何らかの形で解決可能だ。

木原氏が述べている通り、「文体が非常に特殊」であるがゆえに「翻訳に手間や技術がかかる」という理由である。本作はほぼ全編、会話や独白のみで成り立っており、しかも会話の途中での変化や中断が、さながらラジオドラマのト書のように非常にリアルな形で再現されているというシロモノだ。しかし、そうした翻訳の課題は「技術的な問題」であり「解決可能」との頼もしい言葉通り、ピンチョンやパワーズなどの現代ポストモダン文学の翻訳の名手であり、２０年以上『ＪＲ』を愛好し研究しつづけてきた木原氏の完成度の高い訳文により、自然な「読みやすい」日本語へと昇華されている。さらには簡潔丁寧な訳注に、登場人物表と舞台地図を添えて、初挑戦の読者にも非常に優しい設計となっている。

だが邦訳にして１０００頁近くになる本書の分厚さ、しかも一般に難解と言われているポストモダン文学、となると、いくら翻訳の完成度が高くても、尻込みしてしまう読者諸賢も多いことだろう。けれどもそんな心配はご無用。本作の基調はあくまでコメディーであり、肩肘張らずに気楽に読んでも非常に面白い。ぜひ気軽にこの名作に挑戦してもらいたい。木原氏もこのように述べている。

> 『ＪＲ』のように手の込んだ力作は当然、再読、再々読され、次々に浮かび上がる仕掛けに感嘆するというのが一つの大事な接し方だろうが、他方で、この作品はいわゆる「難解」「難渋」な小説とは決定的に異なるコメディーであり、あまり肩に力を入れずに読んでも、それはそれで充分に楽しめるはずだ。

たとえば登場人物の奇抜な行動（登場人物が列車で言葉の通じない外国人のフリをして車掌を煙に巻き子供用切符で済まそうとする場面）、言葉遊び（壁紙製造会社の無価値の株券を「紙切れ（ウォールペーパー）」と呼ぶといった類のものなど多数）、軽妙なやりとり（「でも、ソフトボールをやってどうして給料がもらえるの？」「ソフトボールで給料がもらえるって誰が言った！　週末と勤務後にやるんだよ」という類のやりとりなど多数）があり、こうした場面・会話がページの至る所に「小ネタ」として登場す

$$

$$

るために、驚くほど読者を飽きさせず、大いに笑わせてくれる。そもそもメインの設定である「１１歳の少年ＪＲが大人をこき使ってアコギな方法で金儲けをして会社グループを立ち上げる」という荒唐無稽さからして、本作がコメディーとして企図され描かれた作品であることは間違いないだろう。(そしてこの荒唐無稽な設定をテーマと共に見事に描き上げた超級の技量こそ、本作が世界文学たる所以なのだ)

では、この『ＪＲ』という作品のテーマは何だろうか。これについて訳者の木原氏は本書あとがきで、名作『ハサミ男』で知られる推理作家・故殊能将之氏の海外小説レビューブログ「The Reading Diary of Mercy Snow」の紹介文を引いている。

> 「ウィリアム・ギャディスとその代表作『ＪＲ』の名を日本の読書人に最も広く知らしめたのは、推理作家で読書家としても知られた故殊能将之氏のブログ記事（二〇〇二年八月六日付）かもしれない。（中略）そこにはこう書かれている。
>
> ——Money? のひと言で始まる本書のテーマはずばり「金」。ＪＲという高度資本主義社会のハックルベリー・フィンを主人公にした金融ブラックコメディであり、ものすごくおもしろい。
>
> （中略）
>
> おそらくこれほど簡潔に『ＪＲ』の本質を説明する日本語の文章は他にないだろう。」

ずばり「金」、である。普通に書いてもおもしろいストーリーのはずなのに、先に挙げたような「特殊な文体」をギャディスが選んだ理由は、現代における「金」のあり方を描くこと、すなわち、グローバル化の進む資本主義社会の混沌とした様相を表すため、ということも殊能氏はこのブログで述べている。

そして木原氏は「金」というテーマを持つ『ＪＲ』の時代を超えた普遍性、むしろ今日、全世界がグローバル化＝「アメリカ化」した状況との共通性を指摘し、このように記す。

> 一九七五年に発表されたこの小説は今でもまったく色あせていない。いや、むしろ、世界のそこら中がアメリカになってきた（グローバル化してきた）今日、時代が、あるいは世界が、この小説に追いついてきたとさえ言えるかもしれない。ＪＲは公衆電話を学校に設置させて正体を隠しながら投資活動を行うが、今ならインターネットと携帯電話を通じて同じことをするだろう。二〇〇一年、アメリカではエンロン事件があった。二〇〇八年にはリーマンショックがあった。その他にも、現在のグローバルな経済システムの非情さや醜さはあらゆるところに姿を現しているが、システムそのものはまさに『ＪＲ』が戯画化している通りのものである。二〇〇六年の日本でも、ある著名な投資家が「お金儲けは悪いことですか？」と脳天気に言い放って注目を集めた。今日、アメリカをはじめとする一部の国のリーダーの言動や表情に顕著に見られるナイーブな貪欲さは、明らかにＪＲと通底している。

かくしてギャディスの目論見は成功し、本作は不朽のものに、いや、全世界が「アメリカ的」になり、さながらカネを巡ってマネーゲームが繰り広げられる、生き馬の目を抜くような今の時代にこそ、本作で戯画的に描かれる、金儲けに奔走したり、あるいは翻弄されたりする人々のさまは、ますますリアリティを持って感じられるのだ。

本書『ＪＲ』は、このグローバル・ファイナンスの時代に生きる全ての読書家の腹をよじらせ、目を開かせる、よき財産となるだろう。世界文学の代表作として本作を世に問いたい。

$$

＄＄

●あらすじ（実際は複数のサブプロットが重なるが、主人公ＪＲの動きを中心にまとめた）

ロング・アイランドのとある公立学校に通う１１歳の少年ＪＲ・ヴァンサントは、学校の友達と一緒に、郵便局の私書箱を秘密に設置し、そこに届くダイレクトメールや通信教育勧誘のメールを交換したりそれに返信したりするのが趣味だった。ＪＲは小遣いを貯めてほぼ無価値の株をいくつか手に入れ、それを元手にわらしべ長者のように投資の規模を拡大していく。ある日、学校の社会見学で証券取引所を訪れた際に、証券会社社長や重役から話を聞く機会を得る。そこで投資についてのパンフレットを集めまくり、さらに私書箱に届いた投資情報を元に、ある計画を立てる。とある陸軍部隊がピクニック用フォークを購入しようとしている。一方で、とある海軍部隊では軍需余剰品として木製フォークを売りに出していた。この海軍の木製フォークを買いつけ、陸軍に売って儲けようというのだ。木製フォークの買いつけのために資金が必要で、ＪＲは勝手に「６年Ｊ組」名義で口座を開設。学校の倉庫に勝手に一時的にフォークを保管。ビジネスのために電話を使おうとすると教師がうるさいので、電話会社に手紙を書き、学校に勝手に公衆電話を設置させる。そして小学生である自分が商談に行くわけにはいかないので、音楽家志望で臨時の音楽教員であったエドワード・バストの弱みにつけこんで代理人をさせる。

かくしてＪＲは木製フォークの売買に成功し、イーグル紡績会社の買収に乗り出す。化学繊維への転換が上手くいかずに業績が傾いていたイーグル紡績会社は、社債を発行して何とか経営を成り立たせていた。ＪＲは社債を大量に買い占め、それを株式と交換させて経営権を乗っ取る。

次いで醸造会社ワンダー醸造、紙マッチ会社 X-L リトグラフ社、玩具メーカーレイ-X 社、葬儀会社に老人ホーム会社、など、潰れそうな中小企業ばかりをどんどんと乗っ取って「ＪＲファミリーカンパニー」を形成していく。

エドワード・バストはＪＲが借り上げたニューヨーク９６丁目の安アパートに押し込められ、そこに毎日洪水のように届く金融や株式・ビジネス関連の郵便物の山の中で埋もれながら、取引先や指示を飛ばすＪＲからひっきりなしにかかってくるテレビ電話の応対をして、代理人としての役割をなんとか果たし（させられ）ていた。

しかしＪＲがエース開発という鉱物開発のベンチャー企業（と見せかけた投資詐欺会社）の買収に乗り出したとき、マンハッタンの上流階級のモンクリーフ一族が経営するタイフォン・インターナショナル社という企業がそれを問題視する。なぜならば、エース開発が出鱈目を打って「鉱脈が眠っている」としていた土地は、タイフォン社が極秘にパイプラインの敷設を進めようとしていた場所だったからだ。

タイフォン社の弁護士は、この「ＪＲファミリーカンパニー」に対して探りを入れようとするが、代理人とその黒幕の正体は一向につかめず「この会社の実態がどうしてもつかめません」と嘆息する。

ＪＲは買収した企業の連携を強めていく。エース開発が権利を持つ森林を伐採→紙マッチ会社で原料にする→紙マッチに広告を印刷→木材から分離したセルロースを化繊としてイーグル紡績に供給→不要になったイーグル紡績の紡績機を南米諸国に売り払う→木材をより有効活用すべく製紙会社を買収→製紙会社で作った紙を活用するため出版社を買収→娯楽小説や教科書に広告を差し込む……そしていよいよ、「ＪＲファミリーカンパニー」は、ＪＲ自身にも手に負えぬほどの巨大コングロマリッドに成長し、タイフォン社などを巻き込み、株式市場に大波乱を巻き起こすのだ――

＄＄

$ $

『JR』目次

舞台地図
登場人物一覧
ＪＲ
訳注
訳者あとがき

$ $ $

著訳者紹介

著者

ウィリアム・ギャディス　（William Gaddis, 1992-98）

ニューヨーク出身の小説家。デビュー作は『認識』（1955）で、ジェイムズ・ジョイスを継ぐ作家と激賞されたが、1000 頁近い長さと難解さのために、広く受け入れられることはなかった。それから 20 年後の 1975 年、第２作『ＪＲ』は全米図書賞を受賞。1985 年に第３作『カーペンターズ・ゴシック』。そして 1994 年の第４作『自己責任の遊び』で再び全米図書賞を受賞した。寡作ながらも現代アメリカの最重要作家の一人として知られる。

訳者

木原善彦（きはら・よしひこ）

1967 年生まれ。大阪大学准教授。訳書にトマス・ピンチョン『逆光』、リチャード・パワーズ『オルフェオ』、ベン・ラーナー『10:04』など多数。著書に『実験する小説たち――物語るとは別の仕方で』、『ピンチョンの『逆光』を読む――空間と時間、光と闇』、『UFO とポストモダン』など。

$ $